

定本
坂口安吾全集

第八卷

宮本
坂口
安良
全集

第八
卷

冬
樹
社

定本 坂口安吾全集 第二卷

昭和四十三年四月十月初版 第一刷发行

著 者 坂 口 安 吾

発行者 滝 泰 三

印刷所 三容堂印刷株式会社



東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稲田鶴巻町二二番地

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区九段南二の四の一四

電話東京(三三)三四二一(大代表)

振替東京七五七

定本

坂口安吾全集

第八卷

監修

石川 淳

編纂

奥野 健男

河上徹太郎

檀 一雄

小林 秀雄

平野 謙

獅子 文六

福田 恆存

題字

石川 淳

第八卷
目
次

〈I 評論〉

月日の話

新春日本の空を飛ぶ

わが工夫せるオジャ

戦後合格者

人生三つの愉しみ

〃能筆ジム〃

悲しい新風

小林さんと私のツキアイ

安吾人生案内

誠実な実験者・マ元帥

フシギな女

或る選挙風景

負けラレマセン勝ツマデハ

チツポケな斧

「大國主命」

238 229 174 167 151 150 40 37 36 32 24 18 14 12 11

女忍術使い

孤立殺人事件

戦後文章論

歴史探偵方法論

光を覆うものなし

私は地下へもぐらない

風流

安吾行状日記

茶の間はガラ空き

チャタレイ傍聴記

見事な整理

親が捨てられる世相

世紀の死闘

もう軍備はいらない

明日は天気になれ

文芸時評

489 367 358 353 346 341 339 337 300 290 289 277 269 262 242 239

「鷹」

近況報告

ゴルフと「悪い仲間」

諦めている子供たち

砂をかむ

豊島さんのこと

育児

世に出るまで

迎合せざる人

〈Ⅱ選評〉

「懸賞探偵小説」選評

「讀賣新聞小説」選評

「芥川賞」選後評

〈Ⅲ題跋〉

507

507

508

510

512

514

516

516

523

『小魚の心』序

『爐邊夜話集』後記

『秋風と母』跋・尾崎士郎氏へ

『白痴』後記

『いづこへ』あとがき

『逃げたい心』序

『吹雪物語』再版に際して

『道鏡』後記

『墮落論』後記

『風博士』後記

『教祖の文學』後記にかえて

『火』作者のことば

解説

奥野健男

作家論

松本清張

解題

関井光男

539

540

542

545

547

548

550

554

556

557

559

560

563

575

581

評

論

Ⅱ

I 評

論

月日の話

歳末にコヨミをもらってページをくりつつ新しい年を考える。

今月の歴史というところを読むと、異様な気がするのである。このことは一般の人々は気付かないことで、それが普通なのだが、小説家、特に歴史小説を書いている私などから見ると、大変奇妙に思われることが多い。

たとえば、義士の討入はころは元祿十四年極月（十二月）十四日とナニワ節にうたわれていることはたれも知る通りである。

けれども、これは太陰暦でいつてのことで、今日通用している太陽暦からいうと、たぶん、翌年の一月十何日ぐらいに当たらないかと思う。

今日の太陽暦というものは明治政府が採用したもので、それ以前は太陰暦であるから、一ヵ月以上のヒラキがあるのが

普通である。私がこのことを肝に銘じたのは、私が島原の亂を書くかと思つて文献を調べはじめた時からで、切支丹の文献は、資料が日本側と外国側と二種類あり、日本側の日付は太陰暦であるが、西洋側は太陽暦なのである。したがつて、事件の発端が十二月にかかつている天草の亂の如きは、太陽暦では翌年にかかつており、太陰暦の元日に天草の切支丹組が油断していると思算定したものだそうである。すべてがこのようなでなければ、記念日などというのは実は全く日付け違いなのである。

新春日本の空を飛ぶ

元旦正午、DC四型四発機は滑走路を走りだした。ニコニコと親切な米人のエアガールが外套を預る。真冬の四千メートルの高空を二〇度の適温で旅行させてくれる。落下傘や酸素吸入器など前世紀的なものはここには存在しない。爆音も有って無きが如く、普通に会話ができるのは流石である。

讀賣社の年賀状をまくために高度六百メートルで東京を二周する。神宮と後樂園の運動場が意外に大きい。ビルディングは小さなオモチャ。機上から見た下界の物体は面積の大小しか存在しない。

第一周はみんな珍しがって窓に吸いついていたが、二周目には音がないから振りむくと、一同イスにもたれ飛行機は何百回も乗り飽いてるよとノウノウたる様子。チエッ、珍しがっているのはオレだけか。相棒の福田画伯だけセッセとスケッチしているから、私も商売。ひがむべからず。

低空飛行は苦痛だ。四発の大きな図体を窮屈そうにかしげて最小限の緩速で旋回しているから、フワッと沈むユレベーターのショックが間断なく続き、その激しい時は失速して落ちそうなショックをうける。飛上して三分目に、すでに吐き気に苦しむ。東京上空旋回十分。高度あげつつ横濱から横須賀へ。山上にまるい大穴が花弁型にたくさん有るのは旧砲台の跡らしい。東京では皇居を目近に見下してきた。日本の空にはタブーがなくなったのである。

海上へでる。すでに高度三千。海は一面に紺のチリメンの光りかがやくシワである。黒い点々は雲の影。讀賣の若い記者が私の肩をたたたく。

「強いですね」

「何がです」

「あなたは酔わないですね」

冗談じゃないよ。三分目から内々前途をはかんでいるのだ。しかし、そうか。飛行機に乗り飽いたわけではなくて、御一統、のびていらせられたのか。

輸送指揮官、原社会部長、蒼ざめて現わる。

「この機長、よう知っとるわい。東京の上空三回廻ってやるからビラまくのはそれだけで止めとけ言うんや。各都市毎に旋回しおったら殺人問題や。たつて頼みこまんで、よかったわい」

蒼白の高峰秀子嬢に單刀直入、きく。

「ずいぶん苦しそうですね」

「いいえ！」

断乎として否定する。

「キャプテンもエアガールも、親切。本当に愉快的な空の旅です！」

航空会社と讀賣新聞と航空旅行そのものにあくまでエチケツトをつくす志。凛々しくも涙ぐましい天晴れ、けなげな振舞い。

代って純情娘の日本代表、乙羽信子嬢に、これ又、單刀直入。これは甚しく正直だ。

「ええ、とても、苦しいのです」

困りきった笑顔が可憐そのものである。

「今後空の旅を利用なさいますか」

「こう苦しくては、ちょっと……」

これは又、爽やかなほど正直である。表裏一体をなし、さすがに日本娘の兩代表だけの事はある。

しかし誰よりも音をあげたのは福田画伯であった。

「僕はですね。ヘタな飛行家よりも飛行時間が多いですよ。

しかしこんな苦しい旅は始めてだ。大型機のせいですよ」

結論、簡單をきわめる。實際は旋回廿分の東京見物が悪かったようだ。

酔わない人物、ただ一人。巨人軍の青田君。彼は特攻隊の飛行士だったそうだ。飛行時間二百時間の由、テレながら答える。腕に自信がないらしい。しかし僕のために説明の勞をとり、空からの觀察の良き指南役であった。今の高度三千六百ぐらい。青田君は教えてくれる。讀賣の人、計器を見て戻り、

「青田君の目測、ビタリですよ」

と、呆れた顔で私にささやく。

三原山の上空をとぶ。火口をかこんで砂漠がクッキリと、二ツの色と形が美しく面白い。西洋菓子のように。砂漠の西方へ三本半の真ッ黒い溶岩の流出が見える。もう煙はない。富士が見える。頭だけ雪。平凡な富士だ。真上をとぶと面白い形であろうが、沖合遙かに見れば地上から見ると同じ形の富士である。天城を越える。三原山のように砂漠がないから、冬の山々はただ単色のヒダが無限にひろがっているだけ、真上からでは下の山々にはヒダだけで高さが存在しない。

静岡、清水をすぎて雲海の上へでる。青空の深さ。太陽の白光の強烈なきらめき。熱氣が顔にやきつく。高度四千二百。これより動揺皆無。

カクテル・パーティがはじまる。エアガールがニコニコと往復多忙である。スカッチ・ソーダ（スコッチ・ハイボ―

ル)の氷の冷めたさが沁みるようだ。にわかに吐き気が治って、酒の酔いとなる。死人が墓石を倒して踊り出たようなものだ。奈良から晴れた空を急降下、伊丹飛行場につく。耳を痛がる人が多い。急に増圧のせいだ。着陸卅分後まだ耳が聞えないとこぼす人もいる。私は潜水になれたせい、全く耳に変化を感じなかった。

岸田兵庫県知事、ミス大阪等出迎え多勢である。伊丹ときいて、福田画伯と私は、伊丹の生一本を飲まずんばあるべからずと脱出を試みたが、軍用飛行機で外へ出してもらえなかった。さっさと機上へ押し上げられ有無を言わさず連れ戻されてしまった。

往路は見物がてら諸方ゆっくり回って二時間半。復路はまっすぐ一時間十三分。下田上空をすぎて下降、一直線に羽田へ滑りこむ。着陸のバウンド皆無。あざやかな手並。しかし降下中に皆々また苦しむ。直前に機上で食事したからだ。結論として、東京見物の低空飛行と機上の食事を慎めば(スカアチは別也)空の旅は便利で愉快なものといえよう。

わが工夫せるオジヤ

私は今から二ヵ月ほど前に胃から黒い血をはいた。時しも天下は追放解除旋風で多量のアルコールが旋風のエネルギーと化しつつあった時で、私はその旋風には深い関係はなかったが、新聞小説を書きあげて、その解放によって若干の小旋風と化する喜びにひたった。その結果が、人間に幾つもあるわけではない胃を酷使したことになったのである。

私は子供の時から胃が弱い。長じて酒をのむに及んで、胃弱のせいで、むしろ健康を維持することができたのかも知れない。なぜかという、深酒すると、必ず吐く。ある限度以上には飲めなくなるから、自然のブレーキにめぐまれ、持ち前の耽溺性を自然防衛してもらったという結果になっているらしい。

一度血を吐いたのは、深酒というよりも、ウイスキーをストリートで飲む習慣が夏からつづいて、その結果であったと